

英語イディオムの諸相

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2012-05-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 丸山, 孝男 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/12262

英語イディオムの諸相

丸 山 孝 男

(1) はじめに

英語を学習していく過程で、私たちはいろいろな困難な問題に直面する。発音の問題、文法の問題、口語表現、俗語表現、方言、文化的背景の理解の問題、ユーモア、ジョークなどの理解の問題とあげていけば、きりがなくらいある。こういった諸々の困難な問題としてイディオムに習熟することも付け加えねばならないだろう。この場合の習熟とは、単にイディオムを受動的に理解するというのではなく、話し言葉であれ、書き言葉であれ、イディオムをコミュニケーションの手段として積極的に駆使するという意味である。イギリスやアメリカで発行されている一連のイディオム辞典をみると、編者は必ずといっていいほどイディオムの習得の必要性和同時に習得のむずかしさをも強調している。たとえば、数々のイディオム辞典を編纂した、今は亡きイギリスの英語学者 Frederick T. Wood は、特に、prepositional idioms を取り上げて次のように述べている。

“One of the most difficult aspects of the English language to master is the idiomatic use of prepositions. Native speakers are not always sure of it, and it is even more troublesome to the foreign student.”⁽¹⁾

イディオムに習熟することのむずかしさは、英語を母国語とする人たちにとってさえも当てはまることなのであり、英語を母国語としない人たちに限って言えることではないのである。

昨年、私はイディオム辞典『感情表現・発想別英語イディオム活用辞典』

(大修館書店より刊行)の出版の機会に恵まれたが、多種多様なイディオムの存在に今さらながら唖然としたものである。この「イディオム辞典」は、そのタイトルが示しているように各項目の配列が従来型のアルファベット順ではなく、感情表現、発想別に分類されているので、たとえば、「怒り」や「喜び」を表すイディオム表現にはどんなものがあるか、一目でわかるようになってきている。試みに、「怒り」を示す動詞的用法のイディオムを列記してみよう。

get someone's blood up, make someone's blood boil, burst a blood vessel, go off at the deep end, fly off the handle, make someone's hackles rise, do one's nut, hit the roof, go through the ceiling, blow one's top, get all steamed up, see red, make the sparks fly, jump down someone's throat, rant and rave, look daggers at, get someone's goat, let fly at. と数限りなくある。

これらは、ほんの一部である。これ以外に「怒り」を表す形容詞的用法、副詞的用法のイディオムもある。確かに、英語のイディオムは豊富であり、多彩である。この含蓄のある豊富なイディオムが英語の表現をより豊かなものにし、独特なニュアンスを与え、面白くもしているのである。

(2) イディオムとは何か

イディオムは日常の生活のなかで口語慣用表現として頻繁に使われるが、そればかりではない。俗語表現としてのイディオムもあるし、実際、イディオムはラジオ、テレビ、小説、詩、映画、新聞、雑誌と各種マスメディアのなかで自由自在に使われている。

英語のイディオム (idiom) は日本語では、慣用語句、決まり文句、常套語句、熟語、成句などと訳されている。これらの訳語は、それぞれイディオムがもつ特性を表している。イディオムとはひらたく言えば、日常生活のな

かによく使われている「言いまわし」のことである。そして、ほとんどのイディオムは、それを構成するひとつひとつの単語はやさしいものであっても、それらの単語が結びつき、イディオムとしては、それぞれの単語の意味とはまったくかけ離れた、新しい、別な特殊な意味をもっているということである。つまり、イディオムを構成する各々の単語の意味を理解しただけでは不十分だということである。このことが、英語を母国語でない人たちにとっては、イディオムの習得をむずかしくしている所以でもある。このへんの事情をイギリスの英語学者、Jennifer Seidl は次のように説明している。

“We can say that an idiom is a number of words which, taken together, mean something different from the individual words of the idiom when they stand alone. The way in which the words are put together is often odd, illogical or even grammatically incorrect. These are the special features of some idioms.”⁽²⁾

イディオムがもつ豊富な表現力に力点をおいて、Barry Ward は、次のように簡潔に定義している。

“You may be wondering what exactly an idiom is? Idioms are those expressions which give life and color to the language, and without them English would be very gray and boring.”⁽³⁾

また、イディオムの形は、ほとんど固定したものであって、別な形におき変えられないというのも特長のひとつとして付け加えてよかろう。冠詞、不定冠詞ひとつとっても、その使い方には注意を要する。意味ががらりと変わってしまうからだ。たとえば、**to kick a bucket** は、文字どおり「バケツをけとばす」の意であるが、**to kick the bucket** は口語表現で「死ぬ、あの世に行く」を意味する。

(例文) I want to enjoy life as long as I can before I kick the bucket. (私はあの世に行く前に、できる限り長く人生を楽しみたいんだ)⁽⁴⁾。

ちなみに、**a drop in the bucket** は口語表現で「大海の中の一滴、ごく小

量, 雀の涙」などの意である。

(例文) The money we've given to the charity is only a drop in the bucket, but even small amounts help. (私たちがチャリティに寄付したお金は, 雀の涙ほどだがそれでもいくらかの足しになるでしょう)⁽⁵⁾。

特にイディオムは比喩的に用いられることが多いので, 同じキーワードの bucket でも, コンテキストにより, それぞれの意味が違ってくる場所にイディオムの習得のむずかしさがある。

(3) イディオムの効用

英語を母国語としない者が外国語としての英語を学ぶ場合, 最低限度の基本単語や言い回しを覚えておけば, なんとか相手との意思の疎通ができ, それでこと足りるという考え方があるのは事実である。現に, ある程度的基本的な単語や熟語だけを使って英語を話すことはさほどむずかしいことではない。だからこそ, ちまたには「涙なしの英会話」, 「英会話は基本単語で十分」, 「英会話 4 週間」, 「カタコト英語で十分」, 「中学英語でこれだけ話せる」などというようなタイトルがついた本があふれているのである。膨大な数にのぼるイディオムのことを考えれば, このような, いわゆる英会話の本が次から次と発行されているのも何ら不思議なことではない。このような現象を単なる商業主義と割り切れるものではない。

ところが, 旅行者としてほんの少し最低限度の英語を話せばよいという場合ならいざしらず, 話し相手との多少こみいった話となると, とてもカタコト英語では間に合わないのが実状である。本当の意味での意思の疎通は無理である。イディオムは会話に色どりや潤いを与え, イディオムを欠いた会話は不自然である。適当な文脈, 状況のもとで使われるイディオムは会話を生き生きとしたものにするだけでなく, 活気と味わいを与える。コミュニケーションの手段のなかでイディオムが潤滑油として果たしている役割は, い

くら強調しても強調しすぎることはない。会話に色どりや潤いを与えるという点では、イディオムはなくてはならぬ調味料のようなものである。イディオムは対話のなかで話をスムーズに進める仲介者としての役割も果たしているのである。イディオムは人間の感情、思考と密接に関連しており、言いたいことを適確に表現してくれるのである。だから、適切なイディオムの含まない会話は単調で、無味乾燥なものとなる。話し手と聞き手のあいだでイディオムがどのような役割を果たすか、アメリカの言語学者、Adam Makkai は次のように力説している。

If a person always uses a bookish, stilted expression and never uses an idiom in the right place, he might develop the reputation of being a dry, unimaginative speaker, or one who is trying to be too serious and too official. The use of idioms is, therefore, extremely important. It can strike a chord of solidarity with the listener. The more idioms you use in the right context, the more at ease native Americans will feel with you and the more they will think to themselves 'this is a nice and friendly person— look at how well he expresses himself!' ⁽⁶⁾

英語という言葉のなかに占めるイディオムの位置、重要性、コミュニケーションの手段としての英語を考えると、イディオムの習得は避けてとおれぬ課題である。

(4) イディオムのむずかしさ

私たち日本人が英語のネイティブ・スピーカーと話をしているとき、意味がわからず、突然、会話がとぎれることがある。こんなとき、相手はきまってイディオムを使っている場合が多い。ネイティブ・スピーカーどうしの会話となるとなさらである。ただ単に相手の話すスピードが速すぎてわからないのではない。(もちろん、このような場合も多々あるが)。イディオムが

深く関与しているのである。日常の会話のなかで多用されるイディオムの理解なしに、英語を理解したり、駆使することは不可能といってよい。現に、私の友人のアイルランド人は、日本人と英語で話すときには、極力、イディオムの使用を制限するといっていた。会話をスムーズに進行させるためには仕方がないとのことである。

イディオム習得の最大のむずかしさは、いろいろとあるイディオムをどんな文脈で、どんな状況のもとで、どんな場面で、どんな間合いで、どんな風に適切に使うかということである。イディオムの適切な使い方といっても英語の母国語話者なら、長い年月をかけて自然に習得してきたのであろうが、英語を外国語として学んできた者にとってはそうはいかないのである。特に、英語を母国語としない私たちがイディオムを使う場合、大きな落とし穴がある。それは、むやみやたりに使っても、そのことが鼻につき、かえって相手をしらせさせたり、コミュニケーションの手段として逆効果になるということである。イディオムによっては古くさい表現もあれば、陳腐な表現もある。公式の場や公式の文書のなかで使われるイディオムもあれば、軽蔑的、侮辱的に使われるイディオムもある。親しい間柄でのみ用いられるイディオムもある。イギリスでのみ使われるものもあれば、アメリカでのみ使われるものもある。詩人の James Kirkup は、イディオム使用の功罪について次のように述べている。

“A complete knowledge of idioms is essential for the understanding both of the English language and of English culture in general. But it is important to use idioms with discretion. If we crowd our sentences with idiom upon idiom, the effect becomes comical. One develops a certain feeling for the appropriateness of idiomatic usage, and the sign of a good English stylist is his ability to introduce idioms in a pertinent manner, to point an example or to highlight an emotion, but always with a sense of the appropriate time and place to use them.”⁽⁷⁾

もちろん、イディオム辞典によってはスピーチ・レベルやスピーチ・ラベルを詳しく付したものもある。なかでも『研究社—ロングマン・イディオム英和辞典』（研究社）は最高のものであろう。この辞典は語法、由来の説明など、ありとあらゆる点で、原典である *Longman Dictionary of English Idioms* をはるかに凌ぐものである。

(5) イディオム学習の教材

私は、特に英語圏の国々に旅行したときに、必ず本屋に立ち寄り、イディオム辞典とイディオムに関する教材を購入することになっている。その数は両方あわせてかなりの数にのぼる。もちろん、辞典に関しては、日本にいても購入できるものが多いし、日本人が編者として加わっているイディオム辞典もかなりある。ところが教材となると事情が変わってくる。英語圏では、手を変え品を変え、まさに多種多様な日本で市販されていない教材があまりにも多くあるのだ。私は、長い間このことが不思議でならなかったが、最近、次のように考えている。

同じ英語という言葉を教える場合でも、英語を母国語とする教師と英語が母国語でない教師とでは、そこにイディオムに関して自ずから認識の差が生じているのではないかということである。つまり、英語を母国語として使っている教師が英語を教える場合、生徒が「英語圏で生活をする」ということを想定しているにちがいない。具体的に言えば、英語圏で生活をするということは、イディオムをある程度マスターしていなければ、相手との意思の疎通に重大な支障をきたす。テレビを見たり、映画を見たり、新聞、雑誌、小説を読んだりする場合でもイディオムの知識なくしては英語の理解力に限りがある。英語を母国語とする教師が英語を教える場合、前提としてこのような認識があるのではないだろうか。極端な話、英語を教えるということは、同時に最低限度のイディオムを教えることでもあるという認識をもっている

のではないだろうか。この場合の認識とは、当然、実生活の経験がもとになっている。何年か前にロンドンにある英語学校をのぞいてみたときに、そこではイディオムの習得に重点をおいた授業をやっていた。

これに反して、たとえば、日本人が英語を教える場合、イディオムに関しては、それほどさし迫った認識がないのではないだろうか。考えてみれば、これは無理もない話で、日本に住んでいる限り、特殊な分野で働いている人たちを除いては、日常生活のなかで英語を話したり、聞いたり、書いたりすることはまったく不必要なことだからである。英語が実生活と結びついていないのだ。この落差は大きい。私は、ここでひらきなおってものを言っているわけではない。日本人の英語の教師と英語を母国語とする英語の教師との間にイディオムの習得について認識の差があるからといって、日本の英語教育を批判的に捉える気持ちはさらさらしない。日本の英語教育が効果をあげていないとも思わない。「役に立つ英語」については、いろいろと議論のあるところであるが、少なくとも伝統的な日本の英語教育は無駄ではない。ただ、ここではイディオムに関して日常生活の体験からくる、ぬぐいさることのできぬ認識の差があるという事実を率直に認めたいだけの話である。

(6) イディオムの由来

それぞれのイディオムには、現在の意味をもつようになった多彩な歴史的、文化的な背景がある。長い間、語り継がれてきた古い民話、伝説、神話、寓話、風俗、習慣、迷信もイディオムの背景にある。野球、ボクシング、フットボール、クリケットなどのスポーツ用語だけでなく、動物の生態、人間の行動、自然現象をつぶさに観察した結果、生まれたものもある。数々の文学作品から、シェークスピアの作品から、「新約聖書」、「旧約聖書」から生まれたものもある。今さら指摘することでもないが、特にシェークスピアが英語の発展に寄与した功績にははかりしれないものがある。

スポーツ用語を例にとれば、クリケットから数々のイギリス英語のイディオムが誕生した。**play cricket**には、文字どおり「クリケットをする」以外に「フェアにふるまう、公明正大にふるまう」という意味がある。**It's not cricket.**は、競技の場で、単に「ルール違反」ということを意味するのではなく、「フェアでない、公明正大ではない、スポーツマンシップに欠けている」などの意味でいろいろな文脈で使われる。

(例文) *It's definitely not cricket to cheat in the entrance examinations.* (入試にカンニングするなんて、まったくフェアでない)。**as lively as a cricket**は「とても元気な、非常に活発な」などの意味で使われる。

(例文) *My grandmother is eighty-five, but she is still as lively as a cricket.* (私の祖母は85歳だが、とても元気だ)。

hat trickはクリケット用語で「1人の投手が3人の打者を連続アウトにすること」だが、たとえば、政治家が三期連続で当選した場合、新聞などで *a hat trick of election victories* という表現が使われる。

野球用語からは、多くのアメリカ英語のイディオムが誕生した。**get to first base/reach first base**は文字どおり「一塁に行く」の意だが、日常生活のなかで「第一歩を踏み出す、うまくいく、よいスタートをきる」などの意味で使われる。

(例文) *Michael wants to go to Harvard University and become a lawyer, but I'll be surprised if he even reaches first base.* (マイケルはハーバード大学へ入って弁護士になりたがっているが、かりにハーバードへ入るだけでもびっくりものだ)。

また、このイディオムは、文脈や状況によっては、特に若い人たちの間では「キスをする」の意味でも使われる。**pitch someone a curve (ball)**は「カーブを投げる」が元来の意だが、「人を驚かす、びっくりさせる；ごまかす、だます」などの意味でも使われる。

(例文) *The female teacher asked her students a very difficult question.*

She certainly pitched them a curve. (その女の先生は、生徒たちにとってもむずかしい質問をしたね。生徒たちは、絶対に驚いたと思うよ)。

ボクシング用語の代表的なものとして **throw in the towel** がある。これは文字どおりボクシングで敗北を認めたときにセコンドが「タオルを投げ入れる」の意である。このイディオムはいろんな文脈で「だめだと諦める、さじを投げる、敗北を認める」などの意で使われる。

(例文) Henry could see he had no chance of winning the race. So he threw in the towel. (ヘンリーは、レースで勝ち目がないことがわかった。それで、彼はさじを投げた)⁽⁸⁾。

上記の例はほんの一部である。イディオムの由来は、スポーツ用語に限ってもテニス、水泳、レスリング、バスケットボールなどからのものが数限りなくある。

(7) む す び

英語の運用能力を高めるためには、イディオムの習得が不可欠なものであることは屈辱ではわかっているが、実際に膨大な数にのぼるイディオムをただ単に日本語と対比させて丸暗記することは容易なことではない。機械的な暗記では覚えたはしから忘れていくかもしれない。それでは、イディオムが記憶に残りやすくするために何かよい方法があるのであろうか。もちろん、すべてのイディオムの由来がはっきりしているわけではないが、明らかなものについては、由来を知ることがひとつのヒントになると思う。元来の意味を知ることによって連想が働き、記憶しやすくなるのではないだろうか。*Chambers English Idioms* の「はしがき」では“Several of the idiomatic and figurative expressions in English have interesting origins. Sometimes knowing the origin of a phrase adds to one’s understanding of the expression itself.”⁽⁹⁾ という指摘もある。

たとえば、**keep one's nose to the grindstone**「精をだして働く、一生懸命に働く、人をこき使う；こつこつ勉強する」であるが、今はすっかり姿を消してしまっただが、穀物をひくために使った「ひきうす」には「勤勉」のイメージがつきまとっている。ひきうすに鼻をくっつけるようにして働く様は「勤勉」以外のなにものでもない。まさに「こつこつと働く」のである。

(例文) Henry's employers keep his nose to the grindstone all the time and try to get as much work out of him as possible. (ヘンリーの雇い主は、いつでもめいいっぱい仕事をやらせようとして、彼を休む間もなく働かせる)⁹⁹。

save for a rainy day「まさかの時に備えて貯金する」にしても「雨の日」イコール「まさかの時」というイメージが大事である。天気は晴れているときもあれば、雨が降るときもある。人生も天気と同じで順調にいつているときもあれば、そうでないときもあるというわけだ。ちなみに、「杓子定規の規則、お役所仕事、官僚的形式主義」などを意味する **red tape** の由来は「公文書の書類をとじるのに赤いひもを用いたことがあったことから」とされている。

(例文) There's too much red tape in our organisation. Everyone's tired of all the silly rules which make it difficult to do things quickly. (我々の組織には官僚的な規則が多すぎる。仕事の迅速な処理がなにかと滞ってしまうような馬鹿げた規則には、みんなうんざりしている)¹⁰⁰。

ビデオの活用も大いに役立つものと思われる。ビデオの活用といっても英語による映画を見ながらイディオムを覚えるというやり方である。イディオムを習得するときに、それぞれのイディオムがどのような文脈で、どのような状況、場面で使われるかがいちばんむずかしい問題であるとはすでに述べたが、映画だと、まさに状況、場面つきである。人の表情もよくわかる。たとえば、日本でも第ヒットしたアメリカの映画『プリティ・ウーマン』では、ジュリア・ロバーツ（ビビアンという名の娼婦）が **break the ice** 「(パ

ーティ・会合などで) 座を打ち解けさせる, 緊張をほぐす」を使っている。このときの場面は, リチャード・ギア (エドワードという名の実業家) がピアノをホテルの部屋に招き入れた直後に, ピアノがエドワードに対していう台詞である。娼婦であるピアノにとって, お金がすべてであり, 先ず, お金をもらわなければ, 緊張がほぐれず, 2人のあいだのムードが盛り上がらないというわけだ。ちなみに, このイディオムの由来は, 船の進行を容易にするために文字どおり「氷を砕く」である。

由来をヒントにしてイディオムを知ること, ビデオの活用について体験をまじえて述べたが, ほかに記憶をたしかなものしてくれるイディオム習得の方法はあるものと思われる。 (September 15, 1996)

(注)

- (1) Frederick T. Wood, *English Prepositional Idioms*, (The Macmillan Press Ltd, 1967), Preface.
- (2) Jennifer Seidl/W. McMordie, *English Idioms*, (Oxford University Press, 1978), p. 4.
- (3) Barry Ward, *Idioms from Square One*, (Macmillan Languagehouse, 1996), Introduction.
- (4) 『感情表現・発想別英語イディオム活用辞典』(大修館書店, 1995), p. 289.
- (5) 前掲書, p. 354.
- (6) Adam Makkai, *A Dictionary of American Idioms*, (Barron's Educational Series, Inc. 1975), Preface.
- (7) James Kirkup, *Everyday English Idioms*, (Seibido, 1992), p. 2.
- (8) 『感情表現・発想別英語イディオム活用辞典』(大修館書店, 1995), p. 298.
- (9) E. M. Kirkpatrick and C. M. Schwarz, *Chambers English Idioms*, (Chambers, 1995), Preface.
- (10) 『感情表現・発想別英語イディオム活用辞典』(大修館書店, 1995), p. 12.
- (11) 前掲書, p. 143.